



アパタニの村：家は伝統的な作りであるが、屋根は近代的なトタン

■フォトエッセイ■

伝統と近代の混淆

写真・文 近藤 則夫
Norio Kondo

ーインド、アルナーチャル・プラデーシュ州アパタニの人々ー



アルナーチャル・プラデーシュ州

一九八七年に州に昇格したアルナーチャル・プラデーシュ州はインド北東部に位置し、中国と「国境」を接する州である。「国境」としたのは、これが一九一四年、当時のイギリスとチベットの間で、すなわちチベットに宗主権を主張する中国代表抜きで決められた「シムラ条約」によって定められた「マクマホン・ライン」と呼ばれるものであるからである。インドと中国は一九六二年に主にこのマクマホン・ラインをめぐる戦争し、インドは一方的に敗戦した苦い記憶がある。この戦争によってインドの非同盟主義は実質を失いインドはこの地の防衛のため開発を加速する。現在でも中国はマクマホン・ラインを認めていない。北東諸州はナガランドをはじめ分離主義勢力の動きが活発な地域で、政府軍とゲリラの武装衝突がしばしば起こっている。しかし、アルナーチャル・プラデーシュ州は例外的に治安がよく、そのため近年、政府も観光に力を注いでいる。

観光地として売り出しているジロ (Ziro) を筆者が訪問したのは二〇〇五年一月であった。デリー

イタナガルからジロへ



ジロの都市部



からまず空路でアッサム州グワハティまで行き、グワハティからイタナガルまで五時間かけてバス、そしてイタナガルから車で五時間かけてジロに到着した。この地域に住む「アパタニ」の人々はモンゴロイド系で言葉はシナ・チベット語族の「アパタニ語」を話す。普段、北インドのアーリア系の人々と接触している筆者にとってインド北東部への訪問は新鮮であり、日本人とほとんど同じ顔形で米を主食とする人々と話すのは、久々に心休まる時間であった。彼らにとっても、デリーからきたとはいえ、同じような顔をしている日本人にあまり違和感はないようであった。言葉の問題はあるとはいえ、多くの部族言語が飛びかうなか、日本語ぐらいの

うってこともないのである。

筆者にとってジロのアパタニ社会は伝統と近代、インド的なものと東南アジア的なものが奇妙に入り交じった社会であった。まず「後進的」社会というイメージはあまり当てはまらないといつてよい。インドでは憲法上、後進的な部族 (tribe) は「指定部族」として政治的、行政的優遇策を受けられることとなっている。「アパタニ族」も指定部族とされている。が、どうみてもインドの他地域の人々と比べて後進的とは思えないのである。一人当たり所得もインド平均より高いし、電気も北インドの後進的領域よりは普及している。教育も、少なくとも、ジロ周辺ではかなり進んでいる。さら

夕暮れ時の「バボ」:

男の子がいる家族が「ミヨコ」と呼ばれる祭りの時にだす神聖な飾り付け



に、違和感を増幅させるのは社会的な「混濁」である。例えば言語は、多くの部族が混在する地域なので、母語を除けば共通語が重要であるが、それは今やヒンディー語である。一昔前はアッサム語やベンガル語が共通語の役割を果たしていたようだがアッサム州から分離してから教育の影響で若い世代の共通語はヒンディー語になってしまっている。チベットや東南アジアに近いこの地域の共通語がヒンディーとは！

それでは文化の基層をなす（と人類学者でもない筆者が考える）宗教はどうなっているであろうか。アパタニ社会は元来、太陽と月など自然崇拜を軸とする「ドニ・プロ」と呼ばれる独自の信仰を維持してきた。しかし、キリスト教ミッションの布教活動で多くの人がキリスト教に改宗してきたため、伝統的信仰は減少しつつあるように見える。「ドニ・プロ」でもキリスト教の教会に対抗して独自の教会が建てられ信仰を体系化し保持しようとしている。教会には神聖なミトウーン（インド北東部から東南アジアにかけて生息するウシ科の動物。家畜化され伝統的な富の象徴である）の頭蓋骨が奉納され、毎週、独自の賛美歌が歌われている。しかし、男性の参加は少なく、信仰を守るのはご婦人が主であった。

キリスト教に改宗したある男性に聞いてみた。「自分はもともとドニ・プロであったが、あるとき悪霊（彼らの言葉で「ウィ」といっている）が現れておかしくなったため、祈禱して治癒しようとしたが、直らなかつたことがあった。そのとき、教会でお祓いしてもらったら、悪霊は現れなくなった。このような利益があったので改宗した。そうでなくば改宗しなかつたらう。」

何ともご都合主義的であるが、元来一般の人々に



アパタニの家族：囲炉裏が中心



「タマ」と呼ばれる、悪霊を家に入れさせない神聖なお飾り



ミトウーン：
インド北東部から東南アジアにかけて生息する
家畜化されたウシ科の動物



新しく作られた「ドニ・プロ」の教会

とって宗教とは神聖なものと世俗的なものが交じる混濁であるのかもしれない。厳しい現世を生き抜かねばならない人にとってせめて都合の良い神様を選ぶことぐらいは許されるのである。この世には多くの神様が存在するのだから。

ロバート・レッドフィールドという社会学者は社会的エリートによって担われ、より抽象的で高次の社会的伝統を「大伝統」、より日々の生活に密着した伝統を「小伝統」と呼んだが、小伝統さえ混濁的に変化が急速なのがこの社会なのである。大伝統の方も不安定化しないわけがない。そういえばイタナガルであった有力者のなかには、自分たちはインドに属しようと中

こんどう のりお / アジア経済研究所 南アジア研究グループ

インドの政治を専攻。2004年から2006年までデリーのネルー大学にて客員研究員としてインドの政治、北インドの農村開発などについて研究。

国に属しようとどちらでもよい、都合の良い方につければよいと言っていたが、それは「国家」を仮に「大伝統」といい変えれば、理解できるような気がするのである。

この地域の社会構造には素人の筆者であるが、急速に変化しているこの地も案外、伝統と近代、インド的なものと独自なものをうまく混濁してやっていけるのではないかという印象をもった。かつての日本がそうであったのだから。

ドニ・プロ教会で別れ際に親切にも筆者がデリーまで無事に帰還できるように信仰の歌を捧げてくれた彼らが、今後どのような道をたどるか、また将来再訪してみたい地である。



「ドニ・プロ」教会での祈り：
太陽と月への自然信仰



「ドニ・プロ」教会に集まる人々：
廃れかけた伝統の信仰を受け継ぐのは女性が中心